様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：３４４３４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０５４９
研究課題名（和文）
量的・質的ビリーフ研究から海外ノンネイティブ日本語教師の研修に必要なものを探る
研究課題名（英文）
Qualitative and Quantitative Research on Teachers' Beliefs: Exploration of Needs for Overseas Non-native Japanese-Language Teacher Education
研究代表者
坪根　由香里（TSUBONE YUKARI）
大阪観光大学・観光学部・准教授
研究者番号：８０３２７７３３

研究成果の概要（和文）：本研究は、最終的に日本語を母語としない教師（NNT）と日本語を母語とする教師の協働や NNT に対する研修に資する知見を得るため、NNT のビリーフを解明することを目的としている。タイ・韓国・中国の 3 カ国において、質的調査として新人・経験日本語教師を対象に PAC(Personal Attitude Construct)分析、質問紙調査を行い、質問紙による量的調査も実施した。その結果の一部として、タイ人教師については、①「正確さ志向」と「学習者志向」の２つのビリーフが核となっていること、②学習者と深く関わろうとしており、学習者を理解し、学習者の立場に立って考えようとする意識が強いことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to assess nonnative Japanese-language teachers' (NNT) beliefs to contribute for a better collaboration between NNT and native Japanese-language teachers, and for teacher education for NNT. A series of investigations on teachers' beliefs was conducted in three countries (Thai, Korea and China) by PAC (Personal Attitude Construct) analysis as the method of qualitative research, and by questionnaires as quantitative research. Major findings at this moment are that ① "accuracy-oriented" and "learner-oriented" are the nucleus of Thai Japanese-language teachers' beliefs, and ②Thai Japanese-language teachers have strong awareness of concerning their learners deeply, giving the first priority to them, and taking learners' perspective into account.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,400,000	420,000	1,820,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、日本語教育
キーワード：ノンネイティブ日本語教師、ビリーフ、PAC 分析、SEM（構造方程式モデリング）、新人教師、経験教師

１．研究開始当初の背景
（1）背景

国際交流基金によると、2006 年現在、133 カ国・地域で日本語教育が行われ、海外の学

習者数 298 万人(2003 年時調査の 26.4%増)、教師数 44321 人（同 33.8%増)、教師の中で日本語を母語とする教師（以下 NT）は約 3 割で、約 7 割は日本語を母語としない教師（以下 NNT）であった。このように日本語教育が広がる一方で、中国が中国語の海外普及の拠点となる孔子学院を世界 500 ヶ所に設立する計画を打ち出して、中国語の海外普及に積極的に乗り出し、各地で中国語への関心が高まりつつあった。2008 年に外務省は、日本語教育のさらなる充実を目指し、海外の日本語普及拠点を 10 ヶ所から約 100 ヶ所に増やすという方針を打ち出した。こうした状況下で海外の日本語教師の育成・成長、教師教育の充実といった教師の質の向上は大きな課題であろう。

海外の日本語教育の多くは NNT を中心に、NNT と NT の協働により行われていると考えられるが、NNT と NT のビリーフには各々特有の部分があり、両者がよりよい協働を実現し、効果的な教育を行うためには、互いのビリーフを理解する必要がある。また、教師研修においては、研修側が研修の目的と NNT のビリーフの相違を知っておくことは、より効果的な研修の実施に繋がると考えられる。

(2) 先行研究

言語教育の世界では、1980 年代以降の教授法の転換に伴い、学習者中心、学習者の自律的学習を重視した教育に視点が移りつつある。しかし、NNT を対象とした先行研究からは依然として教師主導の教育観が残っている、または教育観の変化は見られるものの実際の教室活動では活かされていないということが示唆されている。このような先行研究のほとんどは質問紙を使ったビリーフ調査という点で共通しているが、質問紙調査から明らかにできるのは、内在する意識であり、その教師のビリーフと行動との間に矛盾やずれが生じる場合もある。また、質問紙調査からは、そのビリーフがどのようにして生まれたか、どのように教室活動に影響しているかまでは明らかにできない。

小玉・古川（2001）は、個人的なナラティブ（経験談）を分析し、それぞれの価値観を持つに至った経緯や背景について探る試みをしているが、このように量的調査とあわせて個に焦点をあてた質的分析を行い、内在する意識を探ることは、ビリーフと教室活動を結びつける上で重要であり、教師研修の方向性の決定において必要な視点だと考える。

研究代表者らは、日本語を母語とする日本語教師の実践的思考に関する研究を進めてきた。新人教師と経験教師に、ある日本語の授業をビデオで見ながら気づいたこと感じたことをその場で口頭で再生してもらい、そのプロトコル及びビデオ視聴後に書いてもらったレポート、ビリーフ質問票の分析により、教師が即興的にどのような実践的思考をしているかを明らかにする試みである（坪根・嶽肩・小澤 2006、小澤・嶽肩・坪根 2006)。実践的思考とビリーフとは密接に関係している可能性が高いと思われるため、新たな調査として質問紙調査票による量的調査を実施し、構造方程式モデリング（Structural Equation Modeling：以下 SEM）という統計手法を用いて分析し、また、PAC 分析を取り入れ、質的に教師個人の枠組みでも考察することとした。PAC 分析とは「当該テーマに関する自由連想（アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者自身によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」(内藤 2002）である。このように NT に対する量的・質的両面での研究を進めている。

一方、研究代表者らは、本科研において、日本語を母語としない NNT に対して PAC 分析を使用することを考え、そのパイロット調査として、日本在住の NNT3 名（タイ人 2 名、中国人 1 名)を対象に PAC 分析調査を行った。その結果、NNT に対する PAC 分析の使用は、自らの連想語を出発点としていることから、思考上の負担が比較的少なく、また、日本人主導でなく NNT 主導で話を引き出せるという大きな意義があることがわかった。一方で、ノンネイティブに対して PAC 分析を行う場合は、語学力の問題から、実施の際に辞書の使用を認める、必要なら通訳をつける、休憩を入れる、話しやすい雰囲気作りをする、具体的なエピソードから話を引き出す等、いくつかの点で注意が必要であることが示唆された。

２．研究の目的

本研究では、上記の背景及び NT に対する研究を踏まえ、日本語学習者の多いアジア 3 カ国（中国、韓国、タイ）の NNT のビリーフを量的･質的両面で探ることを目的とする。ビリーフの理解は、NNT と NT のよりよい協働を実現するために有用であり、また、教師研修の方向性を決めるうえで一つの重要な指針になると考える。

量的研究においては質問紙調査を実施し、分析では SEM を用いて、NNT の持つ意識（因子）がどのような相関関係・因果関係を持つかを明らかにする。質的研究には PAC 分析を用い、個人の教育観やそれがどのようにして生まれたか、どのように教室活動に影響しているか、また、その意識にはどのような背景があるのかを探ることとする。

３．研究の方法

(1) 量的研究

海外（中国、韓国、タイ）の大学で日本語を教えるNNTを対象として、ビリーフ質問紙調査を実施した。本研究結果は NT に対する調査との比較を予定しているため、NTに対する質問紙を基に、一部NNT特有の項目を追加した質問紙を作成した。また、協力者情報を得るためのフェイスシートについても、NTのものを基に若干の修正を加えて作成した。なお、NTに対する質問紙は、事前にパイロット調査を行い、質問項目の妥当性を精査し、SEMによる分析法についても勉強会を開くなどして学んだ上で作成している。

質問紙は各国語に翻訳してもらったものを別の翻訳者に再度日本語に翻訳してもらい、それを元の日本語と比較して修正することで、翻訳によるニュアンスの相違・誤解を避けるよう心がけた。調査の実施は、各国の大学に勤務するNNTに依頼し、質問紙を配布、返送してもらった。結果はSEMを使って因子間の因果関係の分析を試みている。

(2) 質的研究

各国の大学で日本語を教えている新人教師（教歴１年未満）と経験教師（教歴 15 年以上）各4～5名を対象として、「いい日本語教師」に関するPAC分析および質問紙調査を実施した。質問紙は上記（1）の量的調査で使用したものと同一のものである。教師としての経験年数の違いは、教師として経験したことの広がりの相違につながるため、教師ビリーフにも何らかの影響が見られるのではないかとの予想から、本研究では、新人・経験という区分を設けて調査を行った。PAC 分析は、本科研に先立って行ったNNT に対するPAC 分析によって明らかになった実施の際の留意点を参考に、連想語記入の際には辞書の使用を認める、事前に通訳が必要か確認した上で、必要な場合には通訳をつける、インタビューの間に休憩を入れる等の配慮をしながら実施している。

3 カ国のうち、タイにおいては、国際交流基金バンコク日本文化センター（以下 JFBKK）で実施している教師研修前後で教師の意識がどのように変化したかを丁寧に調べ、研修や教育制度・政策等と教師の成長との関係についても考察した。

４．研究成果

研究代表者および研究協力者１名はタイでの教育経験があり、タイの事情にも通じているため、本研究の１年目はタイにおいて実施し、他国では実施できない教師研修とビリーフとの関係についても研究対象とした。また、調査結果の分析においても、教師研修が与える影響の他、新人教師・経験教師のビリーフの比較、PAC 分析と質問紙調査を併用しての分析や、日本語を母語としない協力者を対象とした場合のPAC分析という研究手法の検討など、様々な角度から分析を行った。現在は、韓国・中国での調査結果の分析を行い、研究成果発表の準備を行っている段階である。以下では、これまでに得られた成果について報告する。

(1) 研究手法の検討

本研究でPAC分析を選んだ理由は、①刺激語（文）から連想する語や文を自由に出してもらうため、半構造化インタビュー等より各個人の内面に迫りやすい、②デンドログラムによって視覚的に見え、調査協力者の自己解釈のサポートになる、③個人のエピソードとのつながりの中で話を引き出すことから、授業観・教師観を捉えることに向いていると考えたからである。

本研究では日本語が母語ではない協力者を対象としており、連想後の記入やインタビューの際に言語的負担が生じる可能性がある場合は、通訳を通してインタビューを行っている。通訳を使用することは、協力者が負担なく話せるというメリットがある一方で、インタビュー方法やデータ分析時に留意すべき点もあると考え、通訳を交えた場合のインタビューの仕方について、留意点も含め、検証を行った。その結果、インタビュアーの協力者への問いかけ方の影響の他、通訳を同席させること自体が協力者に安心感を与えて語りやすくなる可能性があることがうかがえた。また、協力者の語りを解釈する際には、語りの背景にある母語の影響や社会的文脈との関係についても理解すること、通訳者の訳し方は意訳になっていないかを検証することなどに留意すべきであることがわかった。

また、タイ人経験教師４名の中から１名（教師Ｆ）を取り上げ、教師Ｆが持つ「いい日本語教師」像とその背後にある意識を、質問紙調査とPAC分析のデータを併用して丁寧に分析する試みを行った。双方のデータを行ったり来たりしながら相互に照合し分析することにより、質問紙のみでは読み取れなかった意識や、PAC 分析だけでは特定できなかった意図を明らかにできるということがわかった。また、ビリーフの背後にある意識や、一人の教師の中でのずれや矛盾など、新たな気づきも得られた。

(2) 量的調査：質問紙調査の結果より

2009 年にタイ、2010 年に韓国、2011 年に中国において質問紙調査を実施した。このうち、まずタイの結果について、質問の回答を分析した結果を主因子法により因子分析にかけ、抽出された因子の因果関係をモデル化し、SEM を用いてその妥当性を検討した。そ

の結果、タイ人日本語教師の意識は、「正確さ志向」と「学習者中心」という２つのビリーフが核となっており、その影響が強いということがわかった。これらのビリーフが「望ましいとされる教授法を求める姿勢」につながり、研修で学ぼうとする原動力となっていることがうかがえた。本調査からは、NT がタイ人日本語教師と教育現場や研修の場で関わる場合、このようなビリーフを理解しておくことが必要であるということを指摘した。

韓国、中国の調査結果についても SEM による分析を行い、近い将来結果を公開する予定である。

(3) 質的調査：PAC 分析の結果より

①タイ人日本語教師に対する調査

タイにおいては、経験教師・新人教師各 4 名を対象に「いい日本語教師」に関する調査を実施した。新人教師・経験教師の全体的な特徴としては、新人教師・経験教師に関わらず、タイ人教師は学習者と深く関わろうとしており、学習者を理解し、学習者の立場に立って考えようとする意識が強く見られ、それが「学習者中心」として語られることが多かった。しかし、学習者の自律的学習や援助者としての教師という視点はあまり見られなかった。また、新人教師・経験教師それぞれの特徴としては、新人教師は日本語教育をする上で学習者から得られる情報を非常に重要視しており、経験教師は過去や未来をも見据えた時間的広がりに加え、機関全体への目配り、他機関との比較といった空間的広がりも意識していた。こうした経験教師の視野の広さは、その経験の長さからだけでなく、学内外で責任ある立場に置かれることで身に付けたものにもよるのではないかとの推察を行った。

上記新人教師 4 名のうち 2 名については、JFBKK による教師研修の前後に調査を行い、ノンネイティブ新人日本語教師にとっての研修の意義についても探った。そこからは、新人教師２名が研修で得たヒントを元に授業改善を行っていること、その成否を学生の反応などから判断し、効果を上げたと捉えていること、今回の授業改善で満足せず、さらに学び続ける意欲を持っていること、研修前に共に持っていた問題意識が研修で刺激され、発展した可能性があることが明らかになった。さらに、自己研修型の教師養成を目指す研修では、教師のビリーフに働きかけ、参加者の問題意識を顕在化し、研修実施者・参加者間で共有していくこと、学んだことを実践し、結果をふり返る機会を作ること、継続的な研修参加を促すことが重要であることを指摘した。

②韓国人日本語教師に対する調査

韓国においては、経験教師・新人教師各 5 名を対象に調査を実施した。このうち、経験教師 5 名の結果について分析し、5 名に共通する特徴として、1) ほめる、励ます等の学習者への働きかけによる動機づけ、2) 授業外でのつきあいも含めた学習者との関係作り、学習者への愛情・配慮・思いやり、3) 専門知識と日本語力、特に発音の重視、4) 研究と教育のバランス関係、5) 学習者の上達、仕事への取組み・自らの日本語力の向上のための情熱という５つが得られた。これらの発話資料を丁寧に見ていくと、各項目は独立したものでなく、相互に関係して「いい日本語教師像」となっていることがわかった。

この結果を、タイ人の経験教師と比べると、どちらも学習者とのいい人間関係を重要視しているが、韓国人経験教師は、より学習者に対する積極的な働きかけが強いようである。また、どちらも言語知識と日本語力が必要だと考えているが、韓国人経験教師は発音の正確さも含めた NT に近い会話能力をより求めていることがうかがえた。

一方で、評価への言及が多く見られ、大学評価、学習者による授業評価を含む教師評価などが進む社会情勢から、評価されるということが少なからず教育に影響を与えている様子が見られた。

③中国人日本語教師に対する調査

中国においては、経験教師・新人教師各 5 名を対象に調査を実施した。現在、経験教師 5 名の結果について分析を行い、研究成果の発表に向けて準備をしている段階である。

現段階で分析が終了していない韓国人新人教師、中国人新人教師に関しても分析を行い、これまでの NNT に関する知見ともあわせて、成果を発表する予定である。

(4) 得られた成果の国内外における位置づけと今後の展望

本研究では、これまでの主な手法であった質問紙調査に加え、PAC 分析を用いて日本語を母語としない日本語教師のビリーフを探った。PAC 分析を使用したことにより、上述のような「いい日本語教師」についての意識だけでなく、その意識の背景にあるものも引き出すことができたと考える。

研究成果はこれまで広く国内外で報告を行ってきたが、これらは、NNT・NT 両者が協働する際には相互理解に役立ち、教師研修においては研修実施者が研修参加者である教師のビリーフを理解し、そのビリーフに対し適切な働きかけを行うための重要な情報になり得ると考える。

今後は、3 カ国の NNT の相違を探り、NT の調査結果とも比較することで NNT と NT のビリーフの違いを明らかにし、教師の協働や教

師研修に資する成果を発信したい。さらに、新たなステップとして、ビリーフの変容（または保持）とそれに影響を与える要因を探るために、通時的視点からの研究を行うつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、韓国人経験日本語教師のビリーフを探る－「いい日本語教師」に関する PAC 分析の結果から－、大阪観光大学紀要、査読無、13 号、2013、43-54
② 小澤伊久美、嶽肩志江、坪根由香里、八田直美、PAC 分析を日本語非母語話者に実施する際の留意点－タイ人新人日本語教師への PAC 分析から－、ICU 日本語教育研究、査読有、8 号、2012、19-34
③ 嶽肩志江、坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、PAC 分析と質問紙調査併用によるビリーフ研究－あるタイ人日本語教師の事例より－、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、19 号、2012、93-114
http://kamome.lib.ynu.ac.jp/dspace/bitstream/10131/8085/1/IN19-06.pdf
④ 八田直美、小澤伊久美、嶽肩志江、坪根由香里、ノンネイティブ新人日本語教師にとっての研修の意義－PAC 分析によるタイ人新人日本語教師のビリーフ調査から－、国際交流基金日本語教育紀要、査読有、8 号、2012、23-39
http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/bulletin/08/pdf/121206_02.pdf
⑤ 丸山千歌、小澤伊久美、日本語教育研究における PAC 分析を活用した研究の展開、修刚、李运博主编 《新时代的世界日语教育研究》高等教育出版社、査読有、2012、146-152
⑥ 小澤伊久美、坪根由香里、嶽肩志江、PAC 分析法における統計処理の留意点－よりよい実施とデータ解釈のために－WEB 版、日本語教育実践研究フォーラム報告、査読有、2011 年度日本語教育実践研究フォーラム、2011
http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2011forum/2011_RT1_ozawa.pdf
⑦ 小澤伊久美、丸山千歌、ある若手日本語教師の海外派遣前後の意識の変容－非母語話者日本語教師との協働に関する PAC 分析インタビューより－、ICU 日本語教育研究、査読有、7 号、2010、33-53
⑧ 嶽肩志江、坪根由香里、小澤伊久美、教師の実践的思考を探る上でのビリーフ質問紙調査の可能性と課題－日本語教育における教師の実践的思考に関する研究(3) －、横浜国立大学留学生センター教育研究論集、査読有、16 号、2009、37-56
http://kamome.lib.ynu.ac.jp/dspace/bitstream/10131/6488/1/217_04.pdf
⑨ 坪根由香里、小澤伊久美、嶽肩志江、教師のビリーフ研究における PAC 分析活用の可能性と留意点－HALBAU と SPSS による分析結果の相違についての考察から－、言語文化と日本語教育、査読有、38 号、2009、30-37
http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/51978/1/03_30-37.pdf
⑩ 小澤伊久美、丸山千歌、PAC 分析における好ましい統計処理とは－ソフトウェアによってデンドログラムが相違する問題への対処のために－、ICU 日本語教育研究、査読有、6 号、2009、27-47

〔学会発表〕（計 9 件）

① 坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、韓国人経験日本語教師が考える「いい日本語教師」の要素を探る－PAC 分析からの抽出－、2012 年日本語教育国際研究大会、2012 年 8 月 18 日、名古屋大学
② 坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、嶽肩志江、要 弥由美、タイ人日本語教師のビリーフ・システム－構造方程式モデリング(SEM)によるモデル化の試み－、2011 世界日語教育研究大会、2011 年 8 月 21 日、中国・天津外国語大学
③ 小澤伊久美、坪根由香里、嶽肩志江、PAC 分析法における統計処理を理解する－実施時・データ解釈時に留意すべきこと－、2011 年度実践研究フォーラム、2011 年 7 月 30 日、横浜国立大学
④ 八田直美、小澤伊久美、坪根由香里、嶽肩志江、PAC 分析法と質問紙によるタイ人新人日本語教師のビリーフ調査－ノンネイティブ新人教師にとっての研修の意義を考えるために－、第 20 回小出記念日本語教育研究会、2011 年 7 月 2 日、国際基督教大学
⑤ 嶽肩志江、坪根由香里、小澤伊久美、八田直美、PAC 分析と質問紙調査の併用によるノンネイティブ日本語教師のビリーフ研究－あるタイ人教師の事例より－、PAC 分析学会第 4 回大会、2010 年 12 月 11 日、横浜国立大学
⑥ 内藤哲雄、能智正博、丸山千歌、小澤伊久美、PAC 分析のデータを実施者・被検者・第三者が共に語り合うデータセッション、PAC 分析学会第 4 回研究大会、2010 年 12 月 11 日、横浜国立大学
⑦ 坪根由香里、嶽肩志江、八田直美、小澤伊久美、PAC 分析によるタイ人新人・経験

日本語教師の「いい日本語教師」像の比較、2010 世界日語教育大会、2010 年 7 月 31 日、台湾・国立政治大学

⑧ 小澤伊久美、坪根由香里、SPSS と HALBAU による PAC 分析インタビューの比較－デンドログラムの相違がインタビューに与える影響についての一考察－PAC 分析学会第 3 回大会、2009 年 12 月 19 日、明治学院大学

⑨ 坪根由香里、八田直美、ノンネイティブ日本語教師に対する「いい日本語教師」に関する PAC 分析：その結果および PAC 分析使用の意義と留意点、第 38 回日本語言語文化学研究会、2009 年 7 月 11 日、お茶の水女子大学

６．研究組織

(1)研究代表者

坪根　由香里（TSUBONE YUKARI）
大阪観光大学・観光学部・准教授
研究者番号：80327733

(2)研究分担者（平成 21～23 年度）

小澤　伊久美（OZAWA IKUMI）
国際基督教大学・教養学部・講師
研究者番号：60296796

(3)連携研究者（平成 24 年度）

小澤　伊久美（OZAWA IKUMI）
国際基督教大学・教養学部・講師
研究者番号：60296796